

フランスにおけるマオイズムは誤解だったのか？：
コミューンの起源と行方をめぐって
(中国文化大革命と国際社会：50年後の省察と展望：
国際社会と中国文化大革命)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-05-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 上利, 博規
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.14945/00009401

フランスにおけるマオイズムは誤解だったのか？

—コミューンの起源と行方をめぐって—

上利博規

はじめに

中国の文化大革命はフランスにも大きな影響を与え、1967年のパリでは『毛沢東語録』が売り切れるほどのマオイズムの流行が起こった。今日では多くの人が、マオイズムの流行は、中国の事情についてよく知らなかった当時のフランスの人たちが、1956年のフルシチョフによるスターリン批判やハンガリー侵攻などによるソ連への失望、及びソ連に追従するフランス共産党への失望によって、1961年からのソ連と対立する中国に過大な期待を寄せるという一過性の「誤解」によって起こったのだと理解している¹⁾。

しかし、マオイズムの流行を一時的な「誤解」として片付けるには、いくつかの大きな問題が残る。その一つがサルトルである。サルトルは自らは「マオイストではない」としながらも、マオイストたちを支援し続けた。1967年にボーヴォワールと共に中国を訪問し、1970年には街頭でマオイストの新聞『人民の大義』(*la cause du peuple*)を配ることさえしたサルトルもまた、文化大革命を誤解していたといっ

てよいのであろうか。

フランスにおけるマオイズムを、文化大革命の紅衛兵の活躍に刺激されたフランスの大学生たち²⁾がオリエンタリズムも手伝って一時的に熱狂したという、ちょっとしたエピソードのように捉えることには、むしろそのように考えることによってあの出来事を取るに足らない出来事として忘れてしまおうとする力が働いているのではないかとさえ思われる。

本論は、フランスにおけるマオイズムをその始まりから整理し、サルトルがなぜマオイズムを支援したのかを考え合わせることを通して、彼らが Kommunismus をソ連ではなくフランス革命あるいはパリ・コミューンから考えようとする点において共通していたこと、さらに文化大革命もソ連ではなくパリ・コミューンを参照していたこと、したがって文化大革命とフランスにおけるマオイズムには、「中国からフランスへ」という影響関係だけでなく、「フランスから中国へ」という影響関係が

¹⁾ たとえば、Christophe Bourseiller: *Les Maoistes. La folie hisitoire des gardes rouges francais*, Points, 4ème, 2008) がある。

²⁾ フランスにおけるマオイズムは、構造主義的マルクス主義者として知られるアルチュセールのもとで学ぶ学生から始まったと考えられることが多い。マオイズムの始まりについては、第1章第1節で扱う。

あったこと、それゆえフランスにおけるマオイズムの流行は西ヨーロッパにおける文化大革命の影響の一例であるだけでなく、フランスが文化大革命を導く力になっていたこと、などについて論じるものである。

われわれはそこに1789年のフランス革命における民衆の蜂起、1871年のパリ・コミュン、19世紀から20世紀にかけての諸 Kommunismus、1966年の文化大革命とコミュン³⁾、そしてフランスのマオイズムという、一連の歴史的記憶の蓄積とその新しい展開を見出すことができる。フランスにおけるマオイズムの流行の根底には、フランス革命やパリ・コミュンを思い出させるものがあったのではないか。そして、それはサルトルが『弁証法的理性批判』で述べたような、フランス革命において生じた「溶融的集団」(groupe en fusion)の可能性であったのではないか。

確かにフランスにおけるマオイズムは「誤解」という側面はあったが、にもかかわらず逆にフランスは文化大革命に潜んでいるものを正しく理解していたのだ、とさえ考え得る。そして、そのように考えてはじめて、文化大革命とフランスにおけるマオイズム、そしてサルトルさえもが陥っていた幻想、すなわち「人民という正義」があったことが理解できるであろう。

1 フランスにおけるマオイズムの始まりと流行

1.1 フランスにおけるマオイズムの登場

フランスにおいてマオイズムが登場するまでの歴史的背景について簡単に振り返っておきたい。

広く知られているように、1953年2月にスターリンが死去し、1956年にはフルシチョフがスターリン批判を行ったが、これは毛沢東にとって、資本主義国へのすり寄りであり、またスターリンという個人崇拜の批判であった。そのため、毛沢東は、中国内においては、西側諸国との共存路線や走資派への警戒を強めることになるし、また毛沢東という個人崇拜の批判へと飛び火することを恐れた。こうして、1961年には中ソ対立が起これ、中国はソ連から主導権を奪おうとする。このような動きのほかに、1956年のハンガリー動乱においてソ連が武力介入したこと、あるいはアジア・アフリカなどで独立運動が高まるなどの動向により、次第に世界は中国への注目を高めていた。

フランスにおいては、それでもフランス共産党はソ連に追従する保守的な姿勢を崩さなかったために、フランス共産党の方針を批判する人が増し、中には党を離れ

³⁾ 後に述べるように、毛沢東は延安の頃からパリ・コミュンを模範とし、1958年の「人民公社」はコミュンであったし、1967年には党から権力を奪取して「上海コミュン」が生まれた。

る人も出て来た。このような、党の方針に従わず、議会制の外部において独自に理論的あるいは実践的に急進的なあり方を求める人たちは、「左翼主義」(gauchisme)と呼ばれる。その中に、党の親ソ連の立場に反対し、毛沢東に近づこうとする人たちがいた。

1961年2月には、党の改革を求めたマルセル・セルヴァン (Marcel Servin, 1918～1968) やローラン・カサノヴァ (Laurent Casanova, 1906～1972) がフランス共産党から追放されるという「セルヴァン・カサノヴァ事件」が起きたが、1964年9月には、追放された人の中で親毛沢東の人たちによって、フランス・マルクス・レーニン主義サークル連合 (La Fédération des cercles marxistes-léninistes de France)⁴⁾ が結成された。このようなフランス共産党内部からの動きが、フランスにおけるマオイズムの始まりである。

これに呼応するように、共産党に属する共産主義学生連合 (Union des étudiants communistes、UEC) から離れた学生たちが、1966年12月10日にマルクス・レーニン主義青年共産主義連合 (Union des jeunesses communistes marxistes-léninistes、UJCml) を結成した。その中心メンバーは、高等師範学校 (ENS、Ecole Normale Supérieure) の学生たちであり、ロベール・リナール (Robert Linhart, 1944～)、ベニー・レヴィ (Benny Lévy、別名ピエール・ヴィクトール、Pierre Victor, 1945～2003)、ジャック・ブロワイエル (Jacques Broyelle) たちを指導者としていた。彼らは、1965年に『マルクスのために』『資本論を読む』を立て続けに刊行し、構造主義的マルクス主義者として有名なアルチュセールのもとで⁵⁾、修正主義的なフルシチョフを批判し、マルクス・レーニン主義の原点に帰ろうとした⁶⁾。彼らの活動が、フランスにおけるマオイズムの第二の始まりである。

1.2 1967年のマオ・ブーム

マオイズムの第二の始まりである高等師範学校の学生たちの存在は、彼らをモデルとしたゴダールの映画『中国女』(*La Chinoise*) を通じてフランス中に知れ渡るようになり、1967年には若者を中心としてマオ・ブームという社会現象を引き起こすことになる。

デリダと同じ1930年に生まれたゴダールはトリュフォーたちと出会い、1959年

⁴⁾ 1967年にフランス・マルクスレーニン主義共産党 (PCMLF) になる。

⁵⁾ とはいえ、アルチュセール自身はあくまでフランス共産党の内部にとどまっていたので、学生たちが党から離れたことに対してアルチュセールは快く思っていなかったが、同時に彼らを支援もしていた。

⁶⁾ UJCmlの機関誌『マルクス - レーニン主義手帖』をはじめとして、1968年5月革命に関連する様々な資料は、京都大学人文科学研究所共同研究班「ヨーロッパ現代思想と政治」により、「ARCHIVES. MAI68」として <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~archives-mai68/CahiersMarxistes.php> で公開されている。

に『勝手にしやがれ』で映画デビューし、1961年『女は女である』、1963年『軽蔑』、1965年『気狂いピエロ』などでトリュフォーたちと共にヌーヴェル・ヴァーグを代表する監督になっていた。しかし、1967年8月にはハリウッド映画の世界的浸透を批判し、商業主義映画と決別を宣言して「政治の時代」に入り、以降は、商品的価値を帯びた自身の名を語らず、ソ連の映画作家の名を借りた「ジガ・ヴェルトフ集団」(Groupe Dziga Vertov, 1968～1972)として活動する⁷⁾。このように、『中国女』を制作した1967年は、ちょうどゴダールにおけるターニング・ポイントとなった⁸⁾。

映画の内容は、北京放送を聞きながらマルクス・レーニン主義を勉強しつつマオイストとなる出自が異なった5人と、電車の中でのソルボンヌ大学の哲学教師フランシス・ジャンソンと女子大生ヴェロニク(5人のうちの1人)との会話から構成されている。白い壁にIL FAUT CONFRONTER LES IDÉES VAGUES AVEC DES IMAGES CLAIRESと書かれ、棚にはたくさんの「小さな赤い本」、すなわち『毛沢東語録』が並べられた部屋で、彼らはラジオの北京放送を聞き、『毛沢東語録』を掲げながらその言葉を繰り返す。至る所に赤い色が散りばめられた映像は、ポップ・アートの旗手アンディ・ウォーホルのシルクスクリーンのようにイメージが作り出すポップさ⁹⁾を見る者に提供する。また映像だけでなく、映画の中ほどで出て来る「マオ、マオ」と繰り返すポップな歌「マオの歌」(MAO MAO)も印象的である¹⁰⁾。こうして、マオイズムのイメージが観客に伝染し、観客は感染する。感染した観客は、映画館の外で自らも毛沢東を引用するようになり¹¹⁾、マオイズムは社会現象としてのブームとなる。

7) ゴダールと共にこのグループの中心にいたのはジャン＝ピエール・ゴラン(Jean-Pierre Gorin, 1943～)であるが、ゴダールと出会った頃彼はソルボンヌ大学で哲学を学んだ後に、『ル・モンド』で編集を担当していた。彼もマオイストでもあり、ゴダールの『中国女』の制作にも影響を及ぼしている。

8) ゴダールは、1960年『小さな兵隊』、1961年『女は女である』に出演したアンナ・カリーナと1961年に結婚し1965年に離婚しているが、1967年『中国女』に出演したアンヌ・ヴィアゼムスキーとその年に再婚している(1979年に離婚)。この意味でも、1967年はゴダールにとってのターニング・ポイントと言えるかも知れない。

9) ただし、1972年のニクソン訪中の際にウォーホルが制作したシルクスクリーン「毛沢東」は、赤色に支配されていない。むしろ、 Kommunismusの象徴であり、また中国における祝祭色である赤を使用した毛沢東を赤とは異なる色を用いて示しており、それが逆にわれわれにおける「イメージとしての毛沢東」を意識させる。

10) ジェラルド・ゲガン作詞の「マオの歌」は次のような歌詞をもつ。

Le Vietnam brûle et moi je hurle Mao Mao ベトナムは燃え、私は叫ぶ マオマオ

...

C'est le petit livre rouge それは小さな赤い本(=『毛沢東語録』)

qui fait que tout enfin bouge. やっとすべてを動かしたのは。

つまり、世界の状況を変える可能性として毛沢東をあげている。

11) ゴダールはあるインタビューで、『中国女』を制作した理由を、「至る所で中国のことを話しているから」と答えている。この点で、映画『中国女』は、フランスにおける中国の引用の仕方を映像として考えているといえることができる。

ウォーリンは『1968 パリに吹いた「東風」』¹²⁾の「1967年は中国の年になる」の項で次のように述べている。「1967年は中国的だった。パリには、マオイズムの人気を示す徴候があふれていた。『マオ・カラー』と呼ばれる詰襟のスーツが大変な流行だった。どんなに切らずまいとしても、パリの粋な16区のブティックは在庫を確保できなかった。『左岸』の書店は書店で、『毛主席語録』が常時品切れ状態だった。『ブレイボーイ』のフランス版『リュイ』は、ほとんど何も身につけていないモデルに麦わら帽子や赤い星や『紅衛兵』の衣装をあしらって、8ページの見開き特集を設け、中国びいきの時流に乗ることを決めた。そこにつけられたキャプションは、毛語録からの抜粋だった」(p.122)。こうして、ENSの学生によるUJCmlという政治活動は、政治という枠を超えて文化現象・社会現象へと発展していった。

さて、『中国女』の後半では、電車の中で哲学教師と女子学生との対話が続く。哲学教師フランシス・ジャンソン(Francis Jeanson、1922～2009)は実際に女子学生役のアンヌ・ヴィアゼムスキーの哲学教師でもある¹³⁾。その会話の中では、大学や知識人、そして現状を変えるために暴力・テロリズムは許されるのかが問題になる。教師と学生の会話、あるいは勉強会での5人の会話、それらはうまくかみ合わないし、現実を知らない、あるいは現実的基盤を欠いた学生の言葉遊びのようにも見え、ゴダールは世間知らずの若者たちの愚かしさをパロディ化しているようにも見える。映画の中では革命のための暴力が結局はただの殺人という結末を迎えるが、それは愚かさの象徴のようでもある。しかし、ウォーリンが紹介しているように、ゴダールはインタビューで「文化大革命を象徴するもの、それは若さです。偏見にとらわれない道義的・科学的探究心です。…その形態のすべてを承認することはできない…が、この前例のない文化的事実には、少なくとも注目と敬意と友好を示す必要がある」(p.123)と述べている。ゴダールは、結論が見えない若者の行動に関心をもち、そこから何が出て来るかを興味深く見守っていたと考えることができるのではないだろうか。

ところで、ジャンソンは現象学者でありサルトル研究者であり¹⁴⁾、またサルトル

¹²⁾ リチャード・ウォーリン著、福岡愛子訳、岩波書店、2014年。原著は、Richard Wolin: *THE WIND FROM THE EAST, French Intellectuals, the Cultural Revolution, and the Legacy of the 1960s*, Princeton University Press, 2010。

¹³⁾ ゴダールは、たとえば『軽蔑』という映画制作の映画という自己言及的な作品を作っているし、『気狂いピエロ』では主人公が映画を見ている人に語りかけるようなシーンや、女主人公が突如カメラの方を向くシーンなど、映画を一つの閉じた物語世界とするのではなく、現実と絡み合っているものとして制作している。『中国女』では、哲学教師と女子学生との対話は映画の中の話なのか実際の話なのか不透明になっている。ゴダールの映画においては、現実を映画として再現的に語るのではなく、意味や行き先が不確定な現実が映画として進行していると言えるかも知れない。

¹⁴⁾ ジャンソンのサルトル研究書・紹介書には、『サルトル 永遠の作家叢書』(*Sartre par lui-même*, 1955、伊吹武彦訳、人文書院、1957)、『道徳の問題とサルトルの思想』(*Problème le moral et la pensée de Sartre*, 1965、邦訳なし)、『サルトルの生涯』(*Sartre dans sa vie*, 1974、邦訳なし)などがある。

の協力者でもある。そして、『中国女』の中でも、近代西欧の人間中心主義という憂うべき状況に対し、サルトルがこれを乗り越えようとしたという話が出てくる。したがって、哲学教師と学生との対話は、哲学教師ジャンソンを通してサルトルに問いを向けていると考えることもできよう。フランスのマオイストを支援したことで有名なサルトルであるが、時代を代表する知識人であったサルトル自身は果たしてマオイズムを、そして「知識人の使命」をどのように考えていたのか、そして女子学生がジャンソンと議論した主要なテーマの一つである暴力については。これらについて、章を改めて検討しよう。

2 サルトルはなぜマオイストを支援したか

2.1 マオイズムの第二ステージとしてのGPの活動

フランスのマオイズムと1968年の5月革命は時に同一視されるが、実際には別の事柄であり、5月革命の始まりにおいてマオイストはこれを批判さえしていた。しかし、ENSのマオイストたちが5月革命にどのように対応すべきか迷っているうちに、マルスラン大臣は6月、UJCmlをはじめとするいくつかの左翼集団の活動を禁じた。そのため、UJCmlは、マルクス・レーニン主義に立ち返る多数派と、当初の活動を再確認し継続しようとする少数派に分かれ、後者は1968年9月に「プロレタリア左翼」(Gauche proletarienne、GP)の結成に携わった。このGPのその後の活動、及びサルトルたちの支援がフランスにおけるマオイストの第二ステージを作る。

GPの指導的立場に立ったのは、ベニー・レヴィとアラン・ジェスマール (Alain Geismar、1939～) である。また、そのメンバーには、1976年に「新哲学派」(nouveaux philosophes) を結成するアンドレ・グリュックスマン (André Glucksmann、1937～2015) やベルナール・アンリ・レヴィ (Bernard-Henri Lévy、1948～) もいた。

政治的基盤として大衆に期待を寄せる毛沢東は、早くから知識人や文化人が労働者や農民と接触することを勧めてきたが、ENSのマオイストたちは、毛沢東の教えに倣い工場への潜入を試みていた。いわゆる「エタブリ」(établi、établissement) である。GPの時代になっても、彼らはパリ郊外のルノー工場をはじめとする多数の労働運動と結びつき、労働者を抵抗運動へと駆り立て、施設を占拠したり、工場長を監禁した。こうした行動の目的は、労働者が労働方法や労働関係を含む労働環境すべてに自主的にコミットし自分たちで工場を運営することを促すことであった。彼らは、文化大革命において紅衛兵が硬直化・保守化した共産党幹部たちに対して「自然発生的に蜂起」したことを模範とし、自らもフランス国内における労働者の自然発生的な政治実践に参加しようとしたのである。

1970年になるとGPはフォション襲撃事件を起こして有名になった。さらにはGP

の機関紙になっていたマオイストの新聞『人民の大義』¹⁵⁾が押収され、編集者が逮捕されるという事件が起き、続いてジェスマールも逮捕された。これらを受けてサルトルやボーヴォワールたちはマオイストを支援する団体を組織し、サルトルは『人民の大義』の編集を引き受け、以降サルトルはフランスにおけるマオイストと強い関係を結ぶことになる。こうして、マオイストの少数グループは、世間の注目を浴びるようになってゆく。マオイズムの第一のステージはゴダールが、そして第二ステージはサルトルが、マオイズムを社会に伝えたのである。

GPのメンバーがサルトルのような大物が後ろ盾になってくれることを歓迎する意図はわかる。だが、サルトルはなぜマオイズムを支援したのだろうか。ウォーリンは「マオイストは、抑圧勢力を寄せ付けないための『盾』としてサルトルを使った。哲学者サルトルの方でも、マオイストらの若い政治的熱意を養分として人生の秋に知識人活動家としての顔を復活させた」(p.208)と述べているが、果たして再び活動の場が与えられたといった理解だけでサルトルがマオイストを支援したことを説明するのに十分であろうか。次に、サルトルやボーヴォワールたちがなぜマオイストを支援したのか、そしてサルトルが『人民の大義』の編集を引き受け、さらには街頭で配布さえしたのかを考えよう¹⁶⁾。

2.2 サルトルのGP支援と革命的暴力

1970年の時点でサルトルは、アンガジュマン文学などの功績によってノーベル賞候補にもなっていたが、同時に1951年のカミュ『反抗的人間』に対するフランシス・ジャンソン(『中国女』での哲学教師)による批判に端を発する「カミュ＝サルトル論争」¹⁷⁾、1960年にENSで行ったアルチュセールとの対話の中で突きつけられた実存的主体による客観的な歴史認識の可能性への疑義、また1962年にはレヴィ＝ストロースは『野生の思考』の最後の「歴史と弁証法」においてサルトルの『弁証法的理性批判』を批判していた。時代は実存主義から構造主義へと移っており、サルトルの主体主義にかかわって反主体主義的な構造論や関係論が注目されていた。

しかし、サルトルは、与えられた構造の内部において人はいかにして「実践的情性体」から、構造を変革するような政治的实践主体となり得るのか、そしてその際

¹⁵⁾ 逮捕されたジェスマールは1968年の秋から、闘争している人が情報不足によって孤立化しないように、「大衆が大衆に知らせる」ための会報を計画しており、それが『人民の大義』となったと語っている。

¹⁶⁾ 加藤周一は『人類の知的遺産 77 サルトル』(講談社、1984)で、「もっとも有名な作家が、同じ雑誌を同じ街頭で配れば、政府は彼を逮捕して弾圧を世界中に広告するか、逮捕しないで法のまへの平等という原則を破るか、二つのうち何れかを択ばなければならないだろう。その選択を政府に強制することは、青年たちとサルトルとのちがいを通じて、人間としての平等を具体的に示すことである」(10f.)と、街頭での『人民の大義』の配布の理由を述べている。

¹⁷⁾ 『革命か反抗か ― カミュ＝サルトル論争』佐藤朔訳、新潮文庫。

知識人はどのような働きをし得るのか、ということ問い続けていた。そこに、マオイズムや5月革命が起こったのである。すなわち、UJCmlやGPのメンバーが文化大革命の紅衛兵に大衆の主体性の自然発生を見たように、サルトルもまたUJCmlやGPといった若者を主体とする活動に、ソ連やフランス共産党のような組織化された政治とは異なる大衆の主体的活動を見たのであった。それは、サルトルが『弁証法的理性批判』で述べたような、情性化し「集列化」した社会¹⁸⁾ではなく、フランス革命において現れたような「融解的集団」(groupe en fusion)¹⁹⁾の可能性を示すものと思われた。彼らは街に出て、新しく出来事を作ったのである。

彼らについてサルトルがどう考えていたかについては、「フランスにおけるマオイズム」(『シチュアションX』、1972)の中で、次のように述べている。まず、マオイストが自分の心を衝いたのは、暴力²⁰⁾、自然発生性、道徳性という3つの特徴だったという。そして、フランスにおけるマオイズムは大衆の内部で革命的暴力を蘇生させようとした、そして革命家は非合法の行動に運命づけられているものなのだ、と述べている。さらに、「マオイズムにとっては、大衆の間に革命的暴力が誕生するすべてのところにおいて、暴力はただちに、またこの上もなく、道徳的なものとなる」と述べる。なぜなら、分断されて「集列化」されていた人々は、革命的暴力のさなかに一時的ではあるが自らを歴史的主体としてその行動において示し、「新たな自己」として新しいつながりを発見する。このつながりが、主体相互の新しい結びつき、すなわち非ブルジョワ的な道徳を生む基盤となるからである。むしろ逆に、このような新しい相互的な道徳の回復のために、革命的暴力は必要とされるといってもよいかも知れない。ここにわれわれは、大衆の主体的活動＝革命的暴力＝道徳的、というサルトルの考えを知るのである。

こうして、マオイストの行動は、最終的には「大衆の政治」というゴールの始まりであり、「古典的左翼政党は、いまだに19世紀の競争的資本主義の時代にとどまっている」が、「マオイズムは、その反権威的なプラクシスによって、組織された資本主義の時代の新たな階級闘争の形態に適応することのできる唯一の革命的政党とし

¹⁸⁾ サルトルは「フランスにおけるマオイズム」で、このような「集列的な思考」は、労働者に押しつけられた支配階級の思考であり、にもかかわらず「自分自身の思考であるかのように」考えてしまう、と述べている。

¹⁹⁾ サルトルによれば、集団が不活性な状態に置かれていることを「集列化」と呼び、逆にその「集列化」が融解して各人の自由が表面化することを「融解的集団」と呼ぶ。そして、その例として1789年のフランス革命時でのバスチーユ解放を挙げる。「集列化」の例としては、バスを待つ人々の例がよく知られている。

²⁰⁾ 暴力についてはサルトルはずっと大きな関心を抱いており、たとえば『弁証法的理性批判』などでこれを扱っているが、1966年の東京講演「知識人の役割」においても、「あらゆる暴力を非難する」という考えの誤りを指摘しており、1970年のジェスマール逮捕の際には、奴隷化された現実という暴力に対抗できるのは法的手段ではなく、「人民の暴力」であると述べている。また、キューバ革命の際にも、サルトルは革命的暴力を肯定的に語っている。

て出現した」ということになる。

1967年にはボーヴォワールと共に中国中国視察に行っかなり裏切られた気分になったサルトルではあったが、フランスにおけるマオイズムに対しては、全面的な賛成というわけではなかった²¹⁾が、常に連帯という姿勢を見せ続けた。

しかし、果たしてサルトルは正しかったのであろうか。そして、文化大革命における「造反有理」²²⁾は？ サルトルの暴力論と「造反有理」はどこまで「正義」と言えるのであろうか。

3 コミューンと「人民の正義」

直接行動に出る紅衛兵の姿は、議会制や党のような代理制を否定し人民・大衆が直接統治するようなコミューンを望んだフランスにおけるマオイストの心をつかんだ。それは、ルソーが憧れた直接制民主主義まで遡ることができるフランスの理想ではなかったか。

3.1 毛沢東とコミューン

「大躍進」(1958)の失敗によって国家主席は劉少奇に移り(1961)、文化大革命とは毛沢東による劉少奇たち「走資派」からの奪権闘争だったとよくいわれる。毛沢東が進めた「大躍進」において、集団化された農業組織としての「人民公社(コミューン)²³⁾」が設立された。共産主義(Kommunismus)は元来「コミューン主義」であり、ソ連のような国家による一元管理体制ではなく、自治的共同体である。毛沢東が農村をコミューン化したかったのは、スターリンのように農村を都市との関係の中に位置づけるのではなく、農村を経済的に自立したものに成長させたかったからだといわれている。

文化大革命の始まりにおいて、1966年5月16日の「五・一六通知」で「中央文化革命小組」(陳伯達、康生、江青、張春橋ら)が組織されたが、「中央文化革命小組」の方針を受けて、5月25日には北京大学の党幹部を批判する壁新聞が出されて人々を驚かせた。このとき毛沢東はそれは「中国におけるパリ・コミューンの宣言にあたる」という支持声明を出している。

さらに、1966年8月8日の「16カ条の通達」では、「走資派」から職位を奪ってプ

²¹⁾ サルトルがマオイズムに反対していた主な理由は、彼らが教条主義的な側面を持っていた点にある。

²²⁾ この言葉は文化大革命に使われたが、もとはといえば、1939年に延安で開催されたスターリン生誕60年祝賀大会の際に毛沢東が語った言葉である。すなわち、毛沢東は、複雑な「マルクス主義の道理」を一言で表現するなら「造反有理」だと語った。

²³⁾ パリ・コミューンは「巴黎公社」である。

プロレタリアートに指導権を返さなければならないが（第三条）、文化大革命における諸組織は「新しい何かでなければならない、そのためにはパリ・コミューンに似た選挙制度が必要である（第九条）と述べられている。このようにパリ・コミューンへの言及が繰り返されるのは、中国がソ連と袂を分かたし時、レーニンのコミニズムではなく、それ以前のコミニズムの起源としてパリ・コミューンが参照されているからである。そして、その実現のためには学生たちの革命運動が必要であるが、しかし彼らの運動に対して「いかなる制裁措置もとられるべきではない」として、官僚主義的な党と立場を異にする若者への期待が語られている（第七条）。かくして、1966年夏には高校生や大学生などの若者による紅衛兵が出現し、彼らは全国を回った。

さらに、翌1967年1月には革命的な労働者が表舞台に登場し、紅衛兵と共に既存の行政施設を占拠するようになり、2月5日には上海の労働者たちは上海市の党委員会を解体して「上海コミューン」の設立を宣言した。こうした動きは中国全土に広がったが、逆にそれ以上の混乱を避けるために事態の収拾方向へと転換がはかれることになった。

もう一つの中国におけるコミューンに関する資料について、かつてマオイストとして活動し、ENSの名誉教授でもあるアラン・バディウ（Alain Badiou、1937～）が『コミニズムの仮説』（*L'Hypothèse communiste*、2009）において言及している。それは、1971年の「パリ・コミューン百周年記念祭」の際に出版された『プロレタリア独裁の勝利を、パリ・コミューンの百周年記念祭において祝う』というマオイストならではの貴重な文書である。

バディウは、「コミューンの諸原則は永遠であり、破壊されることはない。その原則は、労働者階級がその解放を勝ち取らない限りいつまでも、新たに、また直ちに実行に移すべき警句に留まるだろう」という言葉を紹介し、「中国人たちは、パリ・コミューンを労働者蜂起の歴史の輝かしいエピソードとしてだけではなく、再始動させるべき原則の歴史的例証とみなしていた」と述べている（p.157）。そして、「もし文化大革命が失敗するとしても、その原則としては依然として実行にうつすべき計画であり続けるだろう」²⁴⁾と続け、文化大革命はロシアの十月革命とではなく、1871年のパリ・コミューンと結ばれているのだと続ける。彼によれば、ソビエトはコミューンの後継者に扮装しただけの修正主義者なのである。

²⁴⁾ つまり、バディウにとってコミューンは、科学実験における仮説のようなものであり、一度実験において失敗したからといって直ちに捨てられるべきものではなく、何度も検証実験されるべき理論である。著書『コミニズムの仮説』は、コミニズムはそのような理論仮説であり、その一つの実験がソ連であり、またその一つが文化大革命であり、フランスにおけるマオイズムであった。バディウはマオイストらしく、コミニズムは単なる理論ではなく、常に実践の中で検証することを求める実験仮説なのだと考えている。

3.2 「人民という正義」の起源と行方

では、毛沢東はパリ・コミューンに何を見ていたのか。パリ・コミューン (Commune de Paris) はいうまでもなく 1871 年にプロシアがフランスに破れた際に不満をもった民衆が武装蜂起してパリ市民による自治政府が一時的に成立した事件である。その 3 ヶ月後にマルクスが、パリ・コミューンは世界初の「プロレタリアート独裁」(『フランスの内乱』) と述べたことはよく知られているが、同時にそこでマルクスは「執行権と立法権を兼ねた行動体」とも述べている。つまり、パリ・コミューンは単なる政権の奪取・交代ではなく、そこに近代国家とは異なる新しいタイプの政治システムの可能性を見ていた。

サルトルはそれを直接制民主主義だと語ったこともあった(『反逆は正しい』)。ウォーリンによれば、「徐々にサルトルは、革命闘争の歴史は革命指導者による大衆裏切りの歴史だった、と理解するようになった」(p.211) が、それに対して「GP 闘士は、自分たちは前衛というよりは人民主義者だと思っていた——それもまたサルトルが認めた彼らの特質だった。それによって、彼らはルソーと毛沢東の融合を目指した。かの有名なジャン＝ジャック・ルソーのように、人は本来『善』だ、とマオイストは信じた。彼らの使命は、労働者階級が自らの声を発見することを援けることだった」(p.210) とも述べている。

サルトルは大衆を指導するのとは異なる知識人の使命について長い間考え続けていたが、実践を通して「人民の友」となり、「人民の大義」を守ろうとするマオイストに、求めていたその答えを見出した。というよりも、おそらくはサルトルはマオイストに出会う前からその答えを持っていたと考えることもできる。『人民の大義』の編集刊行を依頼され、20 号からそれを引き受けた時、サルトルの頭はフランス革命時に発刊されたいくつもの新聞の中の一つである『人民の友』(*L'Ami du Peuple*、1789 年の秋からマラーが刊行) に結ばれていたのではないだろうか。ルソー、フランス革命、パリ・コミューン、それらのフランスの歴史における系列が、サルトルとマオイストが結びつく前提にあったとは考えられないであろうか。そして、毛沢東もソ連と対立するようになり、ソ連から目を離したとき、レーニンではなく、パリ・コミューンを参照・引用するようになったと考えられるであろう。

中国の文化大革命はフランス革命以来のフランスの歴史と結びあっていたとすれば、フランスにおけるマオイズムは一時的な流行であり「誤解」だったのではなく、毛沢東や文化大革命の中にフランス自身を見出したのであり、その根底のあるものを「正しく理解した」ということができるであろう。

しかし、それらはまた「革命的暴力」とも通じ合っているのである。果たして、 Kommunismus は必然的に「革命的暴力」を伴うものであろうか。サルトルが「集理化」した集団が「溶融集団」と化して、受動的人間から歴史を形成する主体となる

というとき、それが抑圧的支配的関係を打破するという意味において正しさをもつとしても、その方法やその先にあるものすべてが正しいわけではなかろう²⁵⁾。人民が自ら「生きた声」をあげたとしても、その声の正しさを保障するものはない。被抑圧者が抑圧について自ら語り出したとしても、その語りの正しさを保障するものはない。

にもかかわらず、毛沢東もフランスにおけるマオイズムも、またサルトルも「人民という正義」に依拠している。ウォーリンの「ルソーのように、人は本来『善』だ、とマオイストは信じた」という言葉は重く受け止める必要があろう。「人民という正義」に無防備に無批判的に依拠し、それが幻想ではないかと問うとしない姿が、毛沢東、マオイズム、サルトルの間をつないでいるように思われる。それは中国においては、「多彩な文化を開花させ、多様な意見を論争する」として始められた文化大革命の前史ともいうべき1956年の「百花斉放・百家争鳴」（百花運動）が收拾のつかない混乱に至ったことにも見て取れるし、ゴダールの『中国女』の中の「マオの歌」で「大衆こそ本当の英雄」（les masses sont les véritables héros）という言葉が「真の政権は銃口から生まれる」（le vrai pouvoir est au bout du fusil）という言葉²⁶⁾と隣り合わせに置かれていることにも見て取れる。

しかし、「経済的な搾取や抑圧的支配は悪である」としても、それが直ちに「被抑圧者は善である」あるいは「被抑圧者による暴力的抵抗は善である」ということを意味するわけではないのである。

²⁵⁾ こうした問題は、ベンヤミンが『暴力批判論』における暴力と法と正義の関係を検討する中で、神話的暴力と神聖暴力を区別することにも似ている。しかし、おそらく決定的に違っているのは、ベンヤミンはそれを「神」的と呼んでいることである。フランスにおけるマオイストであるベニ・レヴィは、その名からもわかるようにユダヤ人であり、1973年のGPの解体以降レヴィナスに関わるようになり、ユダヤ教に関心をもつようになる。

²⁶⁾ もともとは、1927年の国共合作の崩壊の際に毛沢東が語った「政権は銃から生まれることを、どうしても理解しなければならない」という言葉に由来する。